

平成29年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- | | |
|-----|------------------------------------|
| I | スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び |
| II | マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成 |
| III | スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築 |
| IV | 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成 |
| V | スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成 |

道府県・政令市名

【 熊本県 】 水俣市立袋小・中学校

1 実践テーマ	【 Ⅲ 】
2 実施対象者	袋小学校 5・6年 63 名、袋中学校 全学年 91 名 袋小・中教職員 20 名
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 教科名 (講演：体育) ② 行事名 (体験：学校行事) ③ ④ その他 () (2) 地域における活動 ① イベント名 () ② その他 ()
4 目標 (ねらい)	(1) 2020 年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会への 機運を高める。 (2) パラリンピアン生き方を学ぶ。
5 取組内容	平成29年11月21日(火)に本校体育館にて、川野将太氏(車いすテニス：パラリンピックロンドン大会 ダブルス4位、パラリンピックリオ大会 シングルベスト16、ダブルスベスト8)を迎え、講演会を実施した。講演の内容は以下の通りである。 ・川野氏は、2005年に設立された「シーズアスリート」という企業に所属している。「シーズアスリート」は、障害者雇用と支援を目的に設立され、働きながら競技を続けたい障害者アスリートを積極的に雇用している。現在は、ゴールボール4名、車いすテニス1名、車いす陸上3名、視覚障害者マラソン1名の、計9名が所属している。 ・高校生のときに、バイク事故で頸椎を損傷し、車いす生活になった。 ・少しでも機能を回復するためにリハビリに行かなくてはならなかったが、リハビリをしても治らないし、障害のある自分を好きになってくれる人もいないだろう、仕事もできないだろう、と毎晩この先どうしていったらよいのか、という絶望的な気持ちでいっぱいだった。 ・病院でリハビリをしていたときに、同じ障害の人から「リハビリをやると、ひとりで車いす生活ができる状態になる」と言われ、少しずつ

	<p>つ前向きになることができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・退院した後は、障害があってかわいそうという目で見られるのではないか、という不安があったが、友達に支えられ、また刺激を受け、何かしてみようという考えに変わっていった。 ・スポーツが好きだったから、20歳から車いすテニスを始めた。手とラケットをテーピングで固定して行う。 ・パラリンピックの出場条件である世界ランキングに入るためには、海外の大会に出場しなければならない。そのため、移動や宿泊などを全て自分1人で行っている。大変だが、全てはパラリンピックに出場したい、という思いでやっている。 ・ロンドン大会では準決勝で敗退した。出場できた達成感と負けた悔しさで複雑な思いだった。 ・ロンドン大会後は、やめるつもりだったが、ロンドンの悔しさを思い出し、挑戦してみようと思った。 ・障害者にとって、障害者スポーツは自立のきっかけとなる。また、体を動かすことで心身ともに元気になることができる。また、色々な人と出会うことも可能にする。 ・本気だからこそ挑戦は楽しいと思える。やろうと思うことが大切である。
6 主な成果	<p>講師からいただいた講演内容からみた成果</p> <ol style="list-style-type: none"> ① パラリンピック東京大会に向けて努力している人を身近に感じることができた。 ② 本気になって挑戦することの大切さを感じることもできた。 ③ 障害者の人たちが、かわいそうと思われることを気にしていることを知り、障害者に対する態度を考え直す機会になった。
7実践において工夫した点 (事業の特色)	<p>車椅子テニスの実技体験をすることで、日頃できないような体験ができた。車椅子での移動、ボールを打つ2つの動作を同時に行う難しさを体験できた。</p>
8主な課題等	<p>隣接している中学校と一緒に実施したが、実技体験が小学生のみとなり十分実施することができなかった。</p>
9来年度以降の実施予定	<p>実施予定</p>